高等学校

平　成　17　年　度

教育研究員研究報告書

特　　別　　活　　動

東京都教職員研修センター

目　　次

研究主題　　集団や社会の中における
自己の在り方を深める指導の工夫

Ⅰ　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２

Ⅱ　実践事例

１　事例１　ホームルーム活動
～「楽しむ」という目標を立てたホームルーム活動の取り組み～　・・・・　３

２　事例２　ホームルーム活動
～生徒の規範意識を高める取り組み～　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６

３　事例３　ホームルーム活動
～面接練習を通した人間関係形成能力育成の取り組み～　・・・・・・・・　９

４　事例４　ホームルーム活動
～ワークシートを利用した自己理解を深める取り組み～　・・・・・・・・１３

５　事例５　ホームルーム活動
～進路学習と保護者との連携を通じて生徒の意識を
高める進路指導の取り組み～　・・・・１７

６　事例６　学校行事
～地域行事に参加することによって、学校行事の
活性化を図る取り組み～　・・・・・２０

Ⅲ　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４

研究主題

集団や社会の中における自己の在り方を深める指導の工夫

Ⅰ　はじめに

１　研究のねらい

高等学校学習指導要領第４章「特別活動」では、目標を次のように示している。

> 望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

私たちはこの目標を受け、集団での自己実現を図るためには、生徒自身が主体的に自己の在り方を深められるように指導することが重要であると考えた。集団や社会の中で自己の在り方を深めるためには、生徒自身が自己理解を深めると共に、集団や社会を形成する他者をよりよく理解することが必要であると考えた。

このような観点から特別活動において、集団や社会の中における自己の在り方を深める指導の工夫を探ることとした。

２　研究の背景と主題設定の理由

平成１５年１２月の内閣府青少年育成推進本部「青少年育成施策大綱」では青少年育成のための重要課題を次のように挙げている。

> (1) 社会的自立の支援
> (2) 特に困難を抱える青少年の支援
> (3) 能動性を重視した青少年観への転換
> (4) 率直に語り合える社会風土の醸成

学校行事への取り組みや生徒会活動において、生徒が主体的に活動を行うことが望ましい。しかし、自己中心的であったり、受身の姿勢となったりする生徒が増える傾向にあり、生徒による主体的な集団活動の成立は容易ではないと考えた。また、客観的に自己を振り返ることや深い人間関係を形成する機会も減少の傾向にあり、より一層の個に応じた指導の充実が大切だと考えた。そこで、上記の研究主題を設定するとともに、次の仮説を設定した。

> 生徒が他者を受容し、互いにかかわりあう活動を教師が展開することで、集団や社会の中で自己実現を図り、社会的に自立した個人として自己の在り方を深めようとする生徒が育成できる。

３　「自己の在り方を深める」指導の観点

これらのことから「集団や社会の中における自己の在り方を深める指導の工夫」の観点として次の３点を考えた。

(1)主体的な集団活動の成立を引き出す指導を工夫し、生徒の自主的・実践的な態度を高める。
(2)他者をよりよく理解するための指導を通して、生徒のコミュニケーション能力を高める。
(3)よりよい人間関係を築くことの意義を考えさせる指導を通して、自己の在り方を深める。

これらの観点から、生徒一人一人が同じ目的意識をもって集い、学び合い、高め合う活動を展開することにより、社会的に自立した個人として自己の在り方を深めようとする生徒を育成することができると考えた。

Ⅱ実践事例

１　事例１　ホームルーム活動

集団や社会の中における自己の在り方を深める指導の工夫

～「楽しむ」という目標を立てたホームルーム活動の取り組み～

(1)　指導のねらい

本校ホームルームの時間を利用して準備する学校行事に体育祭と文化祭がある。特定の生徒に仕事が偏る傾向が見られ、生徒の一部に不満が生じることがある。また、仲の良い決まった相手とのコミュニケーションしか行わず、意見の違う友人に対し、積極的にかかわったり、自分の意見を表現したりすることがあまりないように感じる。

特別活動とは「望ましい集団活動を通して」という前提があるが、学習指導要領解説によると「望ましい集団」とは「一般的に、集団成員間に心理的な結びつきや所属感があり、その中で適切な役割の分担がなされ、目標を達成するために成員が自発的に協力し、努力するといった条件を備えている集団と考えられている」としている。

何か一つの目標のもと一人一人の生徒が主体的に結びつき、一つの集団を形成し、集団の活動を役割分担によって行うことが、集団における自己実現につながると考えた。昨年度は、目標を設定し、仕事を分担することにより、全員が参加した良い文化祭が行えた。しかし、文化祭の雰囲気をその後の学校行事に発展させることができなかった。その理由は、主体となってホームルーム活動を運営したのが生徒自身でなかったことと、生徒自身が日常におけるホームルームでの生活目標をもたせることができなかったことが原因であったと考えた。

そこで、「『楽しむ』というホームルームの共通目標を掲げ、生徒相互の人間関係を前向きにとらえさせ、積極的に学校行事を全員で楽しむためのグループを編成し、リーダーを選出する。そうすることで、個人からの意見をより多く収集することができ、結果として、より良く自己を表現し他者を受容する姿勢が身に付き、集団の中における自己の在り方を深められる」と仮説を立てた。

この仮説に基づき、本事例研究では、次の３点に配慮しながら実践を行った。

①　生徒相互に十分な話し合いをさせ、自己表現および他の受容が行えるよう工夫する。

②　全体で「楽しむ」活動を実践するために、自己の役割・責任を自覚できるよう工夫する。

③　コミュニケーションやリーダーシップ等の能力を伸張できるよう工夫する。

(2)　対　象　　全日制課程　第３学年　３２名

(3)　取り組み

①　ホームルーム目標の設定

年度当初にホームルーム目標として「恥ずかしがらずに楽しもう」というホームルーム目標を設定し、教室に掲示することにより、ホームルームの生徒に目標の意識付けを行った。４月は修学旅行・進路活動・体育祭準備と過密な日程のため、活動の中心的なリーダー役の選出やグループの分割はできずに体育祭を行うことになった。しかし、「恥ずかしがらず楽しもう」という目標については、ホームルーム活動の１時間を用いて生徒に説明を

した。その結果、体育祭は、生徒はこの目標を十分意識して参加していた。例年、３年生には欠席者が皆無ではないにもかかわらず、このホームルームの生徒は体育祭の応援合戦にほぼ全員参加していた状況からである。しかし、体育祭終了後のアンケートからは、体育祭を楽しめなかったと感じる生徒が数名存在した。その理由は「集団の中で自分の役割や必要性を感じられなかったから」ではないかと考え、文化祭に向け、この課題を解決するための工夫を行うこととした。

② 文化祭の取り組み

文化祭に向け、文化祭実行委員を中心として、グループ分けとグループ代表６名の選出を行い、当初、生徒自身で文化祭を「楽しむ」ための話し合いをホームルーム全体で行った。しかし、すべての生徒が前向きに参加しようとしたわけではなかった。下表のような今回の研究の問題点が浮き彫りとなった。そこで、ホームルームをまとめるために、以下のとおり活動をしてきた。

	活動内容	教師の指導と援助	生徒の変容
７月	文化祭出し物の決定	文化祭を「楽しむ」ための話し合いを提案	文化祭での出し物は「タップ」と決まったが、その話し合いは、言いたい生徒が言い、無関心な生徒は最後まで参加せずという問題点を残した。
	代表者の選出と１０人前後のグループ分割	代表者選出の際考慮すべき３点として指示。 ①グループ内の意見を集約することができる。 ②グループ内の連絡が徹底できる。 ③他のグループとの代表者と相談ができる。 グループ編成の際考慮すべき３点として指示 ①個人が孤立することがないよう配慮する。 ②グループ内で偏りがでないよう配慮する。 ③目標は全員で参加することを徹底	代表者の仕事は文化祭を演技として成功させるだけではなく、グループのメンバーとかかわっていくことが重要な役割であることを徹底する。その結果、グループ代表者は、グループメンバーの夏休みの予定と連絡先を収集し、夏期休業中の活動計画を立てるようになった。
８月	浅草サンバカーニバルの参加	夏休み中に決定したことであったので、必ず一度は連絡をとり参加、不参加の意思の確認を取るよう指示する。	３２名中１８名が夏休み中の行事に参加した。それ以外の生徒についても代表者が不参加理由について確認がとれていたので、小グループとしては機能していた。
９月	グループごとにタップダンスの内容を決定および練習	練習方法について次の２点を指示 ①練習日は週２日とする。 ②練習時間は開始から３０分程度とする。	練習日や時間を絞った理由は、生徒に無駄な時間を過ごさせないためと、準備を代表者にしっかり行わせるためである。結果として、代表者はグループごとに計画的に活動を進められるようになり、メンバーも進路活動で忙しい中でも練習に参加していた。
	代表者の連絡会の実施	代表者同士で助言協力しあうよう指示 主な問題提起は次のとおりである ・協力を得られないメンバーがいる。 ・代表者の気持ちがうまく伝わらない。 ・経験者がいないので練習が進まない ・練習場所、機材の確保が難しい。	一人で考えたり、悩んだりするのではなく、互いに話し合っている光景が多く見られるようになった。また、学校内の教職員をはじめ学校外部からも助言をもらうための行動が見られるようになった。
10 月	文化祭準備	グループごとの出し物の他に、ホームルーム全体としてまとまった出し物を提案	今回の文化祭はグループごとが中心であったが、生徒より「最後に全員で何かをやって、全員そろって舞台で終わりたい」と提案を受ける。また、その意見に反対する生徒、参加を拒む生徒が一人もいない状態であった。

③ 教師の指導

今回の目的は、「楽しむ」活動を通じ、生徒同士が主体的に話し合い、問題を一つ一つ解決させることとした。また、教師と代表者たちと話し合う場を設け、「楽しむ」活動をグループで実践できているかの確認をした。しかし、代表生徒たちの負担は担任の想像を超え

るところ（進路等の諸問題から参加に消極的など）があり、何らかの働きかけが必要と感じた。そして、２学期よりホームルーム活動の最初の１０分間だけは担任の話を聞く時間とし、聞く姿勢の育成と協力し、自分を生かすことの必要性の話をすることとした。その内容は下表の通りである。

	テ　ー　マ	内　　容	目　　的
1	「楽しむ」ことの必要性	「楽しい」と感じられる「場」でなければ、協力を得ることはできない。「楽しい」とは何だろう	ホームルーム目標の「恥ずかしがらず　楽しもう」を定着させるため
2	権威的なグループと民主的なグループ	強いリーダーシップのもとグループを構成する。 （権威的なグループ） 主体的に参加・協力することによりグループを構成する。 （民主的なグループ）	自由な意見交換を実現し、民主的なグループの実現のため積極的協力を得るため
3	自己期待と他人期待	自分がしたいことと（期待）、相手が期待することは一致しないことがあり、それぞれの根拠がある。	相手の考えを受け入れ、自分の考えを主張できる姿勢を形成するため
4	自己の役割について	自分の役割を選択する上で、優先させるべき基準は何か。	集団を構成するうえでの目標を意識させることと、自分の意思をしっかりと表現させるため
5	「楽しい」と「面白い」	「楽しい」とは快いさまを表し、その対象は「場」である。「面白い」は見て楽しいなどを表し、その対象は「個体」である。ホームルーム目標はその内容に「面白い」だけではなく「快さ・充実感」を含んでいる。	互いを思いやる姿勢を期待し、また、全体の場の雰囲気を考慮して自己表現をさせるため。協力は人のためではなく自分のために積極的に行わせるため

以上の取り組みを行うことで、必ずホームルーム活動の最初の１０分間、特に静かに話しを聞くようになった。具体的な変容の様子として、教師の話が始まると、本を読んでいても途中でやめ、教師に集中したりするようになった。

④　アンケートの実施

文化祭を終えて、生徒に文化祭を振り返りアンケートを実施した。文化祭上演をホームルームの生徒全員で踊り終えたことは、今回何よりの成果であったが、ホームルームの他の生徒に対する意識の確認のためアンケートを９項目の質問で行った。（３１人に実施、全員から回収）「文化祭を楽しめたか」の質問には３１名が楽しめたと回答。「話し合う輪は広がったか」の質問には２８名が広がったと回答。また、記述式で「ホームルーム活動での話の内容を覚えていたら答えてください」という質問には２８名がその内容を記述し、「ホームルームメイトをどう思うか」の質問には全員から肯定的な回答を得た。今回のアンケート結果から生徒達は、「楽しむ」場を自分たちの協力により作ることができ、「楽しむ」ことの必要性を意識していることがうかがえた。

(4)　結果と今後の課題

４月当初に「恥ずかしがらずに楽しむ」という目標を掲示し、このことの必要性を話したことは、ホームルーム活動としてまとまる良いきっかけとなった。また、ホームルームを三つのグループに分割することで、規模を小さくし、積極的な話し合いを可能にし、グループの他者に対する期待をはっきりと表現し合うことができた。その結果、アンケートでホームルームや他者を批判的に答える回答がなかったことや、その後の卒業公演の話し合いでは積極的に自分たちだけで話し合いを進めるなどの行動が見られた。

今回の研究を通して、計画的にホームルームを運営することは必要であるが、やらされていると感じるホームルーム活動では生徒にとって「楽しむ」活動とはならないと感じた。

「楽しむ」集団であるためには、共通の目標をもち、集団と個人がお互いに期待しあうことが大切である。そうした「楽しむ」集団であれば安心して自己を表現でき、個性を発揮することができる。今回、ホームルーム活動としては「楽しむ」を実践できたが、ホームルームから学校全体に広がる活動は見られなかった。今後、ホームルームの生徒たちが新しい集団に所属した際、今回のように「楽しむ」を実践し活動の場を拡大できるよう、教師として指導を継続していく。

２　事例２　ホームルーム活動
集団や社会の中における自己の在り方を深める指導の工夫
～生徒の規範意識を高める取り組み～

(1)　指導のねらい

近年、子どもたちの問題行動の低年齢化や多様化が進んでおり、その背景として善悪を判断する力や公共心の低下、社会生活上のルールやマナーを遵守しようとする意識が十分に身に付いていないことなど、規範意識の低下が健全育成上の大きな課題となっている（“所報たまじむ”東京都多摩教育研究所・平成１７年６月発行)。

本校においても規範意識の低下が問題となってきており、授業や集会、学校行事の成立に支障をきたす事態も目立ち始めている。その度に生活指導部や教務部による対処的指導を適宜行っている。しかし、このような指導は教師の一方的な説諭になり、生徒も聞き流してしまいがちである。規範意識の低下という教育課題を解決するには、生徒の規範意識の多様化や変容を教師が適切に把握し、生徒個々に応じた指導と特に生徒との対話を通した指導を重点的に行うことが必要であると考えられる。

そこで、「ホームルーム活動や担任との二者面談において、生徒が他者とのかかわりを含め、社会生活や学校生活を振り返る活動を通して、自己の規範意識と社会生活上のルールやマナーとの差異に自ら気付き、認識することで、自己の在り方を深め、社会・学校集団の一員としてルールやマナーを守ろうとする意識が高まるであろう」という仮説を立てた。

この仮説に基づき、本事例研究では、次の３点に配慮しながら実践を行った。

① 生徒がこの取り組みの意義を理解し、望ましい規範意識を “生徒自らが気付く”活動となるよう工夫する。

② ①の手助けとなるように、教師（特に担任）が生徒個々をフォローアップできる体制を工夫する。

③ 教師や生徒が全校生徒の規範意識の実態や課題を認識できるよう工夫する。

(2)　対　象　　定時制課程　１５５名（全学年計８クラス）

(3)　取り組み

年間行事計画にそって、学校運営に支障をきたさないように配慮しながら、全教師の協力を求め、全校的に表１のような流れで取り組みを行った。

表１　規範意識を高める指導の流れ

月日	活動内容	生徒の活動	評価の観点
９／２６	①　『生活意識チェックシート』の取り組み （ホームルーム３０分）	社会生活あるいは学校生活における様々なシチュエーション（＝設問）に対して、自分がするであろう行動や思うこと（＝選択肢）にチェックしていく。	・　チェックシートに前向きに取り組んでいるか。 ・　作業を通して、自己の規範意識の（ルールやマナーとの）差異に自らが気付いているか。
１０／　４ ～１４	②　担任との二者面談においてフォローアップ （放課後随時）	自分が書いたチェックシートを元に、自己の規範意識について担任と協議する。	・　担任との協議を通して、自己の規範意識の（ルールやマナーとの）差異に気が付いたか。 ・　望ましい規範意識をもとうとする姿勢が身に付いたか。
１０／１９	③　ホームルームで規範意識を高める指導 （ホームルーム２０分） ※教師にもアンケートを実施した。	生徒向け資料『生活意識チェックシートを振り返って』を、担任からの講義を聞きながら黙読する。その後、今回の一連の指導について振り返り、アンケートに記入する。	・　担任からの講義や資料の黙読を通して、望ましい規範意識をもつことの必要性を自分の問題として捉えているか。 ・　一連の指導の意義を理解しているか。

①　『生活意識チェックシート』の取り組み（ホームルーム・３０分）

臨時時間割の中に全校同時実施のホームルームの時間を確保し、チェックシートの記入を行った。なお、進行は担任が行った。

高校生の規範意識に関する問題は、例えば友人関係、性に関する意識など多岐に渡るが、今回の質問内容は、最も基本となる社会生活及び学校生活上のルールやマナーに焦点を絞った。

実施後に担任から個々の生徒に応じたフォローアップをするため、チェックシート（図１参照）は記名式とした。チェックシートの実施に際しては、回答結果により当人が不利益を被ることはない旨を説明した。また、正直に答えづらいと思われる質問については、下記のように、質問を他人の行動をどう感じるかという表現にした。

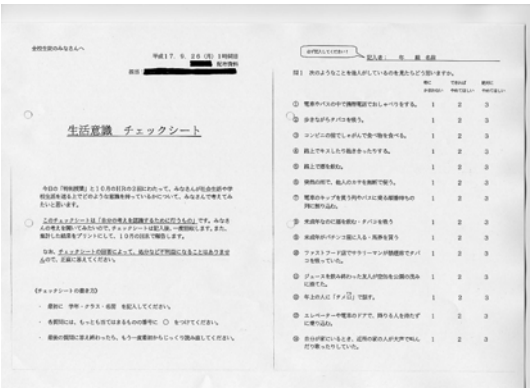


図１　チェックシート

【質問例】次のようなことを他人がしているのを見たらどう思いますか。

「未成年なのに酒を飲む・タバコを吸う」

「突然の雨で、他人の傘を無断で使う」

＜選択肢＞　１．特に構わない　２．できればやめてほしい　３．絶対にやめてほしい

②　二者面談におけるフォローアップ（放課後随時）

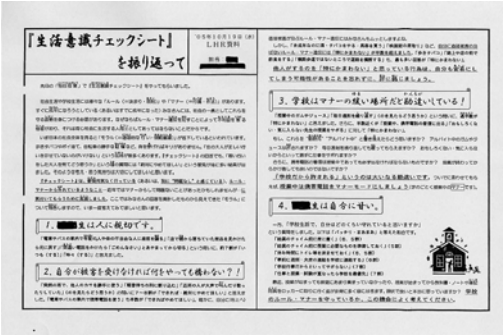
ホームルームで実施したチェックシートは回収・集計し、全教師に結果報告資料を配布

の上、今後の指導点について事前に説明した。また、二者面談での指導に活用してもらうため、事前にチェックシートは担任に返却した。その後、全校で実施される担任と生徒との二者面談の中で、チェックシートを題材にして、生徒の規範意識について話し合った。

二者面談を通して、例えば他者のルール・マナー違反を容認する回答を示している生徒が、それが実は他者に注意することによって人間関係が平穏でなくなることへの恐れが原因で、そう回答していることが判った。このような生徒には、口に出して注意できなくても、まず自分自身が正しい規範意識をもち、ルール・マナー違反をしない態度を貫くことが大切であると諭し、フォローアップとした。

③　ホームルームで規範意識を高める指導（ホームルーム・２０分）

二者面談期間が終わった後のホームルームで、ＨＲ用資料『生活意識チェックシートを振り返って』（図２参照）を題材に担任がホームルームを行い、その後評価アンケートを実施した。（図３参照）


『生活意識チェックシート』を振り返って

1. ■■生は人に優しい。
2. 自分が被害を受けなければ何をやっても構わない？！
3. 学校はマナーの低い場所だと勘違いしている！
4. ■■生は自分に甘い。

図２　ＨＲ用資料

ホームルームでは、今回の一連の活動の意義や、集計結果から見える本校の生徒の実態などを説明し、自分たちの課題について、さらに考えを深めるようにした。

評価アンケートでは、「チェックシートや担任との二者面談を通して自己の規範意識を見直すきっかけになったか」「指導を受けての感想」などを記入させた。なお、教師にも評価アンケートを実施し、今回の一連の指導の流れや「規範意識を高める指導」について感想や意見を求めた。

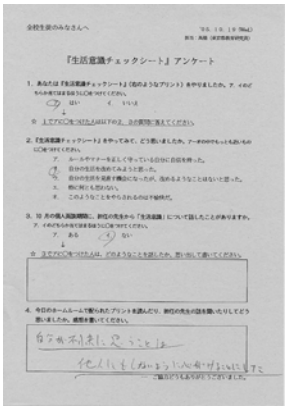

『生活意識チェックシート』アンケート

図３　評価アンケート

(4)　結果と考察

生徒による評価アンケートの結果から（表２参照）問２の結果のように、約６割の生徒が、チェックシートが自分の生活を見直す機会になったと回答した。さらに約３割の生徒が自分の生活を改めてみようと思ったと回答した。

事前に教師には集計結果を配布したが、指導内容まで周知・徹底ができなかったこともあり、問３「個人面談期間に担任の先生と『生活意識』について話したか」に対して、「ない」「あるが、どのようなことを話したか覚えていない」という回答も一部あった。しかし、何人かの生徒には話し合いによりルールやマナーについて考え直す機会となったことが、アンケートから分かった。

また、問４の結果から、多くの生徒がルールやマナーの欠如について認識し、さらに一部の生徒は今後ルールやマナーを守っていこうとする意識をもつことができたということがわかった。

表２　生徒による評価アンケートより　（回答数：８３）

問２「『生活意識チェックシート』をやってみて、どう思いましたか」（カッコ内の数字は%）
ア　ルールやマナーを正しく守っている自分に自信をもった。（１５）
イ　自分の生活を改めてみようと思った。（３１）
ウ　自分の生活を見直す機会になったが、改めるようなことはないと思った。（１５）
エ　特に何とも思わない。（３５）
オ　このようなことをやらされるのは不愉快だ。（４）
問４「今日（注：１０月１９日）のホームルームで配られたプリントを読んだり、担任の先生の話を聞いたりしてどう思いましたか」　（以下、回答は抜粋）
・　○○（本校の名前）の生徒の意識がわかった。自分に対して甘くなっている部分は改めてみようと思う。
・　みんな、自分と同じ気持ちなんだと思いました。　・　だらしない生活が著しく目立っていると思う。
・　自分が不快に思うことは、他人にもしないように心がけることにした。
・　他の場ではマナーに気を付けることが多いけど、学校では守れていないと思いました。
・　自分に関係ないことはやっぱりどうでもいい。　・　人それぞれだから、別にいいんじゃん。

(5)　今後の課題

先の問２で、無関心と回答した生徒が約４割いた。また、問４でも「特になし」あるいは空欄のままであった生徒が一部いた。このような無関心な生徒への対応は今後の課題である。

また、教師のアンケート（回答数：８）の中で、「一般論で話してもタイムリーでないと効果が低いと思われる。生徒自身にかかわることが起きたとき、タイムリーかつ具体的にどこがどう問題なのかを指摘している」という意見があった。

今回のような指導は、継続的かつ反復した指導が必要である。年間行事計画・ホームルーム計画の中でどう位置付け指導していくか、時宜に即した指導とどう関連付けるかなどが課題である。

３　事例３　ホームルーム活動

集団や社会の中における自己の在り方を深める指導の工夫

～面接練習を通した人間関係形成能力育成の取り組み～

(1)　指導のねらい

本校では進路指導の充実のために、職業に関する各教科・科目における実習等に加え、インターンシップ（職場体験）を実施し、生徒の職業観・勤労観の育成に取り組んでいる。また、模擬面接やホームルーム活動等、生徒自身が身に付けた知識や技能を自己表現できるよう発表の機会を多く設定し、段階的・系統的な進路指導を行っている。

しかしながら、生徒は主体的な進路や職業の選択を意識するあまり、集団や社会の一員としての在り方や将来の生き方、社会生活における役割の自覚が希薄になってきている状況がある。

国立教育政策研究所生徒指導センターは「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」（平成１４年１１月）の中で、各学校段階で育成することが期待される能力領域の一つとして「人間関係形成能力」を挙げ、この能力領域はさらに「自他の理解能力」と「コミュニケーション能力」から構成されると整理している（表１参照）。こうした能力の育成には、特別活動の果たす役割は極めて大きい。

そこで、「自己表現の方法について考えさせ、他者の価値観を受容し評価しあう活動を展開することで、集団や社会の一員としての役割を自覚し、コミュニケーション能力を高め、自己の在り方を深めようとする生徒が育成できる。」という仮説を立てた。

この仮説に基づき、本事例では、次の３点について指導のねらいを設定した。

① 自己の思いや意見を伝えるために、生徒に場に応じた表現の方法を考えさせる。

② 役割に応じて、互いに発表しあい、多様な他者の価値観を受容する経験をもたせる。

③ 互いに協力しあう活動を通じて、集団や社会の一員としての自己の在り方を深めさせる。

表 1　職業的（進路）発達に関わる諸能力

領　域	能　力
人間関係形成能力	自他の理解能力 コミュニケーション能力
情報活用能力	情報収集・探索能力 職業理解能力
将来設計能力	役割把握・認識能力 計画実行能力
意志決定能力	選択能力 課題解決能力

(2) 対　象　　全日制課程　第３学年　２３名

(3) 取り組み

① 目標と題材

ホームルーム活動において、個に応じた指導を一層充実させるためには、体験的な活動を通じて、多様なかかわり合いの中で「自分らしさやよさを発揮・発見させる」ことが大切であると考えた。そこで、他者の価値観を受容する経験を通して自他のよいところを判断させ、技能や表現方法を学び、コミュニケーションを図ろうとする能力の育成を目指すこととした。

就職試験や推薦入学試験で多く行われる面接場面を題材として取り上げ、年間の進路指導計画（表２参照）に基づき、ホームルーム活動を行うこととした。

表 2　第３学年　進路指導の計画（抜粋）

月	進路指導部	ホームルーム活動	備　考
6	進路懇談会	進路指導カルテの作成	面談週間
7	模擬面接（１回目）	履歴書、自己推薦カード作成のための活動	終業式
8	会社見学・上級学校訪問		夏季休業中
9	模擬面接（２回目）	面接を題材とした活動	＜就職＞就職試験
１０	試験準備・個別面談指導		＜進学＞推薦入試

（破線枠は、今回の単元部分を示している）

② 評価の観点と評価規準の設定

上記３点の指導のねらいを基に、表３に示す評価の観点と評価規準を設定した。

表 3　評価の観点と評価規準

ア　関心・意欲・態度	イ　思考・判断	ウ　技能・表現	エ　知識・理解
(ｱ) 自分らしさやよさを他者に伝えようとする意欲がある。① (ｲ) 他者のよさや価値観を理解しようとする態度がある。② (ｳ) コミュニケーションを積極的に図ることができる。③	(ｱ) 自分らしさやよさがどこか気が付く。① (ｲ) 他者のよさを受容する体験をし、適切な表現かどうか判断する。② (ｳ)これまでの体験や知識から自分の現状を考えることができる。③	(ｱ) 自己を適切に表現する方法を身に付ける。① (ｲ) 役割に応じた正しい言葉遣いや姿勢で自己表現できる。② (ｳ) グループ内のコミュニケーションを発展させる。③	(ｱ) 役割（立場）による言葉遣いの違いを説明することができる。① (ｲ)　面接の場にふさわしい適切な受け答え方を説明できる。② (ｳ) 非言語コミュニケーションの影響を説明できる。③

（評価規準の後ろの①②③は、指導のねらい①②③と対応している）

③　単位時間における指導計画と評価計画の作成

時　間		学習内容	学習活動	指導の留意点	評価規準	評価方法
導入	5 分	趣旨説明	・内容と目標の説明 ・進路状況把握	相互評価を行い、発見する 先日の模擬面接を振り返る	エ知・理 (ｱ) イ思・判(ｱ)	観察および 記号選択
展開①	10 分	個別的	・他者理解に必要な内容を抽出する ・自己表現を考える	プライバシーに配慮させる 答えることができる内容で受け答え方を考える	ア関・意・態(ｱ) エ知・理(ｲ)	観察および 記述
展開②	25 分	集団的	・班ごとに役割を決め面接練習をする ・相互評価する	言葉遣いを考えさせる 気付いた点を記録しておく 他者の良さを発表し合う	ア関・意(ｲ) (ｳ) イ思・判(ｲ) ウ技・表(ｱ) (ｲ)	
まとめ	10 分	授業評価	・自己を振り返る ・様々な表現方法があることを知る	話し方や聞き方を考える 話す内容と表現方法によって理解が深まることを知る	イ思・判(ｳ) ウ技・表(ｳ) エ知・理(ｳ)	観察および記述 授業評価は数値で評価

④　教材資料の作成

単位時間計画の学習活動がスムーズに行うことができるよう、図１の教材資料を作成することにした。

〔資料を工夫した点〕

- 生徒が授業の流れを理解しやすいもの
- 自分のことを話したくない生徒も参加できるように仮の主人公を設定し、その立場で参加できるもの

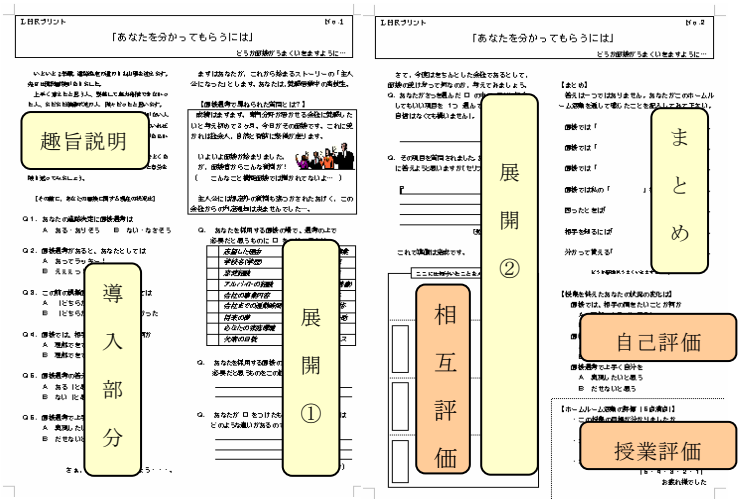


図１　教材資料と時間計画との検討および工夫

⑤　授業の評価について

授業を受けた生徒の「自己評価」と「生徒による授業評価」を実施した。

⑥　面接練習を通した人間関係形成能力育成の取り組み

図２　ホームルーム活動の様子

自分を知ってもらうために、班ごとに「面接を受ける人・面接を行う人・その様子を見ている人」の立場で、質問の仕方や受け答え方に期待することを考えさせた上で、練習を行った。（図２参照）

話し方の違いや適切な言葉遣いがあることを、立場を替えることにより、実際に体験させた。

また、同じ質問であっても、他者の話す内容や表現方法、意欲や態度は様々である。表現を判断し、他者のよい点に気付き、価値観を受容する体験を通して、自己の課題について考えさせた。さらに、面接の受け答え方やコミュニケーションを図ろうとする態度の大切さ、表情や姿勢など言葉以外で相手に与える印象や影響について話し合った。

(4) 結果と考察

①　観察や教材資料の結果

授業のまとめでの話し合いや自己の変容をとらええた結果について、授業者の観察や生徒が記入した教材資料（回答数：２１）から、次のような成果があった。

表４　面接を受ける上で大事なこと

回答の分類	回答数
姿勢や相手の方を見て話す	１５
受け答え方・言葉遣い	１４
声量・はっきりした口調	８

ア　場に応じた表現の方法を考えさせたか

「面接を受ける上で大事なことは何だと思いますか」という質問に対しての自由記述結果は、表４のとおりである。回答数（複数回答可）の多かった意見は、「姿勢や相手の方を見て話す」や「受け答え方・言葉遣い」であった。ロールプレイにより面接を行う側の立場を実際に体験したことで、自己を表現する能力を高めることができた。

イ　多様な他者の価値観を受容する経験をもたせたか

評価規準における「他者のよさや価値観を理解しようとする態度」についての授業者の評価は表５のとおり、９割以上の生徒が「おおむね満足できる」であった。

表５　ア（イ）評価基準とその結果

評価基準	該当者
A　大変満足できる	１４％
B　おおむね満足できる	８１％
C　努力を要する	５％
欠席者	２名

また、面接練習で気付いたことを記録させた内容では「相手に知ってほしいこと」という設問に対して、その回答として「自分の熱意」や「自分の性格」に次いで、「自分の考え方」と回答した生徒が多かった。

他者の様々な表現方法とその内容から、表現に至った経緯や動機にまで関心を発展させるなど、他者の価値観を受容しようとする態度を育成することができた。

ウ　集団や社会の一員としての自己の在り方を深めたか

授業の振り返りで行った自己評価では、表６に示した結果が得られた。

表　6　授業前後における自己理解の変容　　（自己評価結果より）

設問項目	回答例	授業前	授業後
面接では、相手の聞きたいことが何か	理解できる（と思う）	１６	２０
面接選考の受け答え方にはコツが	あった（と思う）	１３	１７
面接の場で上手く自分を	表現したいと思う	１５	１９

面接の場に限らず、コミュニケーション能力を高めるには、自己肯定感をもち他者と接することが求められる。授業後の回答数が高まったことから、相互の信頼関係を体験を通して確認し、自己の在り方を深めさせることにつながったことがわかる。

② **考察**

他者の価値観を受容し、互いに支え合い分かり合える友人を得ることにより、自己理解を深化させると同時に､集団や社会の一員として互いを認め合う態度の育成が期待できる。

またその際に、多様な他者に対して自己の思いや意見を、場に応じて適切に伝えコミュニケーションを図ろうとする態度を伸長することにより、集団・組織の中で豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力の育成が期待できる。こうした能力の育成は生徒一人一人が望ましい集団活動を通して、相互作用し社会性を高めていくものと考えられる。

(5) 今後の課題

授業の実践にあたっては、東京都教育庁指導部義務教育心身障害教育指導課「授業改善ハンドブック」（平成１６年６月）にある「評価を生かした指導の工夫」を参考にした。授業の中で実施した生徒による授業評価と、その結果を生かした授業改善を、今後行う必要がある。

また、すべての生徒が評価規準の評価基準「おおむね満足できる」状況にするような具体的な手だてを設定し、継続的に指導するとともに、図１に示した他の能力領域についても実践を行い、生徒一人一人の職業観・勤労観をはぐくんでいく必要がある。

４　事例４　ホームルーム活動

集団や社会の中における自己の在り方を深める指導の工夫
～ワークシートを利用した自己理解を深める取り組み～

(1)　指導のねらい

本校では、進学を希望する生徒が多数を占める。しかし、将来の具体的な目標をもって、卒業後の進路を主体的に決定するためには、まず自分自身を知り自己の適性を見極める必要がある。現在、各学年において職業インタビューや職業ガイダンス、進路講話や業者による進路適性検査等を行っているが、ホームルーム活動において、より良い人格とより良い人間関係の形成を助長

する活動や、自己の在り方・生き方の考察を通して、将来の進路決定へつながる活動が必要である。思春期にある生徒の中には、かなり自己肯定感が低いと思われる生徒もいる。自分自身も他者も等しく肯定的に理解することで、望ましい人間関係が生まれ社会活動を円滑に行い、さらには真の国際理解・国際交流が可能となるのではないかと考えた。

そこで、ホームルーム活動において、生徒が将来の進路を主体的に決定していく手掛かりとするために「肯定的な言葉を使用することを前提にしたグループワークを通して、自ら考え、話し合いを行うことにより、集団の中での自己理解と他者からの視点による自己理解、また他者に対する発見と理解など自己の在り方を深めることを可能にし、グループ内での協力関係やより良い人間関係を形成するであろう」という仮説を立てた。

この仮説に基づき、本事例研究では、次の３点に配慮しながら実践を行った。

① 与えられたテーマに肯定的な言葉を使用することで、他者及び自己肯定感に気付かせる。

② 自分の意見と他者の意見を比較検討することで、自分の中の気付かない部分や他者の良い部分に気付かせる。

③ お互いの長所を見つめることで、望ましい人間関係が築けることに気付かせる。

(2) 対 象 全日制課程 第１学年 ４０名

(3) 取り組み

ア 事前の取り組み

生徒５人で１グループを編成し、その主体的な取り組みを促すために『GO レンジャーを結成しよう！』というタイトルをつけた。「形」を題材とした「ワークシート」と、この活動に使用する「肯定的な言葉の例」のプリントを作成した。また、「形」を使って行うグループワークなので、イメージしやすくするために５つの形を示したカードを各グループごとに作成し、活動全体の流れがよくわかるように手順を書いた用紙を黒板に準備しておいた。

イ 実際の取り組み

活動に入る前に、活動の目的と手順を説明し、特に次の点について強調した。

- この活動は、いつも以上に十分に考えること。
- 特に自分の良い部分、グループのメンバーの良い部分もしっかりと見つめること。
- 良い部分については、その理由となる場面をよく思い出すこと。

実際の手順については次のように行った。

① 下記の５０語近くの「肯定的な言葉の例」を参考にして、各自で５つの形から連想できるイメージを、それぞれ最低１つずつの肯定的な言葉を使用して定義付ける。(個人作業)

肯定的な言葉の例

愛嬌のある　一生懸命な　おおらかな　落ち着きがある　博識な　大人っぽい　温和な 謙虚な　思いやりがある　感受性豊かな　気配りができる　几帳面な　協調性がある 決断力がある　公平な　さっぱりとした　自主的な　親しみやすい　しっかりしている 慎重な　指導力がある　信念がある　素直な　責任感がある　積極的な　親切な 説得力がある　世話好きな　センスがいい　控えめな　大胆な　理性的な　真面目な 礼儀正しい　冷静な　頼りになる　丁寧な　堂々とした　情熱的な　ねばり強い 無邪気な　約束を守る　優しい　勇敢な　ユーモアがある　陽気な　チャレンジ精神がある 他

② 各自が考えた形をイメージした言葉についてグループで話し合い、各グループの中でのそれぞれの形の定義を決定する。　（グループ作業）

③ 上記の活動をもとに、グループのメンバーがどの形のイメージに当てはまるか、理由付けをしながら各自が考える。（個人作業）

④ 各自で考えたメンバーの形についてグループで話し合い、グループ内のメンバーの形を決定する。　（グループ作業）

⑤ この活動で気付いたことを、以下のようなワークシートの質問に答える。（個人作業）

A “形”の定義に肯定的な言葉を使ったことをどのように感じましたか。また、どのような時に肯定的な言葉を使いたいと思いますか。 B “形”をメンバーに当てはめる時に自分の意見と他のメンバーの意見とを比べて共通点や異なる点など気づいたことを書いてみよう！

⑥ ワークシートが完成したら「振り返りシート」を使用して、本日の活動をまとめさせる。

(4) 結果とまとめ

ワークシートにある質問事項について生徒の回答を以下に挙げる。（以下原文のまま抜粋）

A：
・肯定的な言葉の方が人をイメージするときに相手も自分も嫌な気を起こさずにできる。 否定的な言葉だと軽く、相手を傷つけちゃう。相手をほめたり、すごいなあとか、人を紹介するときに肯定的な言葉を使いたい。
・否定的に印象付けてしまうと悪いことしか見えなくなってしまうから、肯定的な言葉を使ったんだと思う。人の良いところを見つけるときには肯定的な言葉を使うべきだと思う。
・他の人の意見を聞いて、初めて気付いたことが多くてびっくりした。
・形を人に当てはめることで、普段はみえない人の良いところがわかった。
・形を使ったのは理解しやすいと思った。

B：
・選ぶ言葉の雰囲気は似ていても「これだ！」と思うのは違うなあと思いました。
・他の人を見る目はみんなと同じでも、自分のイメージは他の人が見たイメージとは全然違うなあと思った。
・当然ですが、自分のセレクトした形と他人の選んだ形に違いが生じました。その人との付き合い方やイメージにより大きな違いが生まれ、結果、他人が自分をどう見ているかを知るこができました。
・だいたいのイメージは同じ感じだったけど、少し意見が違うところもあって、イメージのとらえ方は、人それぞれ違っているのだと思った。
・普段一緒にいるのに友達と感じ方が違うのに驚いた。もっと友達のことをじっくり考えてみたいです。

活動中の生徒の様子は、大変活発で日頃教科で教えている時とは全く違った面が見られた。また、次の回答（原文抜粋）から、「肯定的な言葉を使用した理由を実感した」や「自分のことや他者のことでの意外な発見があった」ことがわかる。この活動を通して生徒が深く考え自分なりの意見をまとめていると言える。

また、「振り返りシート」については、生徒がこの活動での自分自身について評価することを試みた。全体として、ただ単に「楽しかった」の一言だけで終わらず、自ら考え気付いた点があったという手応えは少なからずあった。生徒からは次のような結果が得られた。（表１参照）

感想・意見　（以下原文のまま抜粋）

・みんなと話し合って、自分はこんな風に思われていることが分かって良かった。「一生懸命」って言われたことがなかったからすごくうれしかった。
・結構まじめに考えると照れくさいけれど、楽しかった。 クラスの友達のことが少し理解できたと思う。
・すごく楽しかったです。 相手の知らない部分とか自分の知らない部分とか知れて良かった。また違うメンバーでやったら楽しいだろうな。 また、こういうのをやりたいです。
・初めはあまり分からなかったけど、やっているうちに意見もいっぱい出たし、たくさん話し合えたと思う。 楽しかったと思います。
・相手のイメージを再確認することができました。 自分がどう思われているかもわかりました。

表１　振り返りシートの回答結果　（有効回答数３６名）

評価項目　／　評価	5	4	3	2	1
①自分に対しての肯定的な言葉を聞いた時うれしく感じましたか。	12	12	10	0	2
②メンバーを形に当てはめる活動で、自分自身について十分に考えることができましたか。	16	13	8	0	0
③メンバーを形に当てはめる活動で、他のメンバーのことを十分に考えることができましたか。	16	15	6	0	0
④グループでの話し合いで、相手の意見をよく聞き尊重することができましたか。	17	13	6	0	1
⑤グループでの話し合いで、自分の意見を正確に主張することができましたか。	14	13	9	0	1
⑥このグループワークを楽しむことができましたか。	20	6	10	0	1

５：十分できた・よくわかった　　４：できた・わかった　　３：どちらとも言えない

２：よくできなかった・よくわからなかった　　１：できなかった・わからなかった

この「振り返りシート」の結果を受けて、ホームルーム活動の時間に結果報告を行った。

今回の活動については、正解や不正解というものはなく、４０人が４０通りの感じ方考え方をしてくれたと思う、と述べた後、次の３点について自覚化を促した。

図１　グループワークの様子

①　肯定的な言葉を使うと、相手を傷つけることなく自然により良い人間関係を築くことができる。大多数の人が肯定的な言葉を使ったときに嫌な感じは受けていない。（表１参照）高校生時代は多くの人が恥ずかしがったり、照れがあったりするので、自分自身も含めて過小評価しがちである。肯定的な言葉を積極的に使うことで人間関係の改善に役立つと考える。

②　自分のこと、グループのメンバーのことをしっかりと見つめ、良い部分を探し意見交換をすると、互いに表面には現れない部分に気付くことができる。自分や他人を正当に評価するということは、社会において、また国際交流の場においてもとても大切なことである。これは自己理解の第一歩になる。

③　今やコミュニケーション力はとても大切である。グループで話し合う時に自分の意見をうまく相手に伝えることができるか、 相手の意見をしっかりと聞くことができるか、言葉のやりとりだけでなく相手が何を考え感じているかなどまでにも想像力を働かせることが大

切である。今後の自分の課題として常に意識してほしい。

以上のような報告を行っている時、 生徒全員が真剣に教師の話を聞き、活動結果をまとめたプリントを集中して読んでいた。

(5)　今後の課題

今回の活動は、進路を考えていくうえでの「自己理解」に関する活動であるので、できるだけ、１学年のうちに実施したい。また、宿泊を伴う移動教室のような時間にゆとりがある時に実施することがより望ましい。「気付き」を重視して行う活動であることを考えると、相当の時間をかける必要がある。また「形」からイメージする言葉を考えさせたが、あらかじめ肯定的な言葉を与えずに、生徒がイメージするままに出発すると、生徒自身が活動を行っていく中で、この活動の意義に気付くことができると考えられる。発表形式を取っていくとさらに全体でこの活動を共有することができる。この活動を今後の進路指導に結びつけていく必要がある。

５ 事例５ ホームルーム活動

集団や社会の中における自己の在り方を深める指導の工夫

～進路学習と保護者との連携を通じて生徒の意識を高める進路指導の取り組み～

(1)　指導のねらい

本校では、民主的で平和な社会に貢献することや自主・自立・協調の精神を身に付けることをもって、生徒の自己実現を支援する学校づくりを推進している。しかし、生徒の基本的学力・一般常識や社会性・基本的なマナーなどの低下が校内で指摘され、本校の生徒たちも決して容易に内定を得られる状況にはない。加えて、進路未決定のまま卒業していく生徒の増加も見逃せない問題となってきている。この様な問題に対処するには、１学年からの進路指導が求められるが、現状では、進路指導部は３学年の就職試験・進学試験対策の指導が中心で、１、２学年への支援は必ずしも十分ではない。

そこで、「ホームルーム活動において、生徒一人一人が自らの生き方と自らの進路を重ねて考えながら進路実現に向けて努力することをねらいとする進路指導を、１学年次から計画的に実施していけば、生徒が社会集団の一員としての自覚を高め、十分な自己理解の上に自らの生き方を考え、その実現を目指して、主体的に進路選択能力を身に付けていける」という仮説を立てた。

このような仮説に基づき、本事例では、次の３点のねらいを設定した。

①　ホームルーム活動で生き方を考えることを柱とした進路学習を実施する。

②　進路選択に欠かせない、生徒の主体性を支援する個別面談を計画的、継続的に行う。

③　学校と家庭との連携の機能を強化するべく、協力体制のあり方を工夫する。

(2)　対　象　　全日制課程　第１学年　３５名

(3)　取り組み

① 本校卒業生が感じた自らの課題の再確認

進路指導計画を作成する前に、進路指導部にある卒業生のデータを活用し、「３年生進路決定者から２年生へのアドバイス」から、“後輩たちが、今、やるべきこと”という設問への回答をもとに、三年間の進路指導スケジュールを立て、１学年２学期における進路学習計画を作成した。

② 生徒と保護者への進路アンケート

９月１日のホームルーム活動で進路に関するアンケート行い、同時に、各保護者にもアンケートを配布し、協力を仰いだ。

表２　生徒向けアンケートの結果：はいと回答した生徒の割合（%）

１，今から将来について考える必要があるか・・・・・・	８５．７
２，あなたの高校生活は充実しているか・・・・・・・・	７４．２
３，保護者と進路について話し合ったことがあるか・・・	８０．０
４，高校卒業時の進路を考えたことがあるか・・・・・・	９４．３

表２に見られるように、進路に関する意識はかなり高い。保護者の意識の高さもほぼ同様であった。進路学習の導入の内容レベルは、生徒の意識の高さに見合ったものではなければならないこともわかった。保護者と生徒の話し合いの機会をもっている家庭の割合も高いと感じた。しかし、個人ごとの生徒の回答と保護者の回答を比較した結果、いくつかの質問で、生徒と保護者の回答に隔たりがある。この数字に、生徒は意志がはっきりしているのに保護者の意志がはっきりしないものの数字を加え、割合を求めた（表３参照）。

表３　生徒と保護者の回答の隔たりの割合（%）

設問の内容	全体に対する割合
１，あなた（お子さん）の高校生活は充実しているか	４２．９
２，保護者（お子さん）と進路について話し合ったことがあるか	２０．０
３，あなたのお子さんの進路希望はどれですか	４２．９
４，保護者とお子さんの意見は一致しているか	６２．８

表２では８割の家庭で進路の話し合いがなされているとの回答があったが、表３によれば、生徒と保護者で進路に対する認識にかなり隔たりがあることがわかる。家庭内で生徒と保護者の会話がきちんと成立するには、思ったよりも難しさがあることが分かった。今回の取り組みの中でも特に考えさせられた点である。この隔たりは、保護者の方々にも考えていただきたいと考え、全てのデータと分析を１年進路ニュースとしてまとめ、各家庭に配布した。

③ 進路学習の実施

９月、１０月に、ホームルームの活動で進路学習を実施した。進路学習で使った進路ニュースのプリントは毎号家庭に持ち帰り、保護者にも見てもらうように指導をした。

表４　２学期進路学習の計画表

月日	テーマ	学習内容　（抜粋）
9/1	アンケートの実施	（省略）
9/7	なぜ進路について１年生のうちから考え始めるのか	高校の進路は自分の人生を考えること、複雑な進学先と就職先、中学生と高校生の違い
9/14	豊かな高校生活を送ろう	充実した生活があなたを成長させてくれる、正しい生活習慣を身に付けよう、基礎学力の大切さ
10/5	フリーターについて考える	フリーターがつとめる職業、フリーター経験者はどう思っているのか、なぜフリーターは不利なのか、
10/12	働くことを考える	人はなぜ働くのか、正社員のメリット、職業を選ぶにあたって考えること、産業の分類、職業の種類
10/26	上級学校を知る	大学と専門学校の違い、学校の種類
11/2	ボランティアについて考える	ボランティアの意義、ユニセフについて

④　個別面談の実施

９月から１０月の放課後、一人１５分間の個別面談を全員に実施した。

(4)　結果とまとめ

①　本校卒業生が感じた自らの課題の再確認

今回の取り組みを行う前に、卒業生の「３年生から２年生へのアドバイス」という冊子の中から、“今、やるべきこと”という質問への卒業生の回答を分析し、高校生自身が進路実現への取り組みの中で感じたことをまとめた。進路指導部の過去の資料の中には、企業の人事担当者の意見や６月の進路懇談会での卒業生の体験談、都立商業高校の報告もあるが、１年生という時期を考慮した指導内容を考え始めることにした。

②　生徒・保護者へのアンケート

生徒と保護者の意思の疎通というのは意外に難しいことなのだと気付かされた。このことは今回の研究の取り組みの中でも、特に気になった点である。そこで、このアンケート内容はぜひ保護者の方々にも関心をもっていただきたいと考え、進路ニュースの形で全保護者に配布した。保護者会の際に、アンケートについてある保護者から「高校生になると子どもまかせになってしまうのでしょうか」と自問しながらのご意見をいただいた。家庭との連携の強化の一端を果たせたと考えている。今後も、保護者会やアンケートを通してその後の変容を見ながら、継続的な指導が必要である。

③　進路学習の実施

過去の担任の時の経験や何冊かの研究書を参考に、「進路決定には自分の人生設計を考えることが大切だ」「今の生活の充実が進路実現に結びつく」いった学習内容を高等学校１学年にとって分かりやすくまとめ、進路学習を実施した。学習時の生徒の態度も進路ニュースの説明を始める前にすぐ見るようになった。生徒の反応からは、「考えが甘いなあと思った」「将来のことを真剣に考えようと思った」「勉強を今以上に頑張る」といった前向きな言葉も聞くことができた。

多くの保護者に進路ニュースには目を通していただいき、家庭との連携に役立った。保護者会でも、「素直に色々なことを知った」という感想をいただいた。

(5)　今後の課題

今回の取り組みを通し、いくつかの課題が明らかになった。進路学習において、生徒が自ら調べたり考えたりする内容が全くなかったこと。今後、生徒が自分の興味関心にしたがって自ら考えたり調べたりする学習課題を設定するなど、生徒自身が主体的に取り組む学習を開発しなければならない。また、担任の考えを保護者に伝えるだけでなく、保護者の意見を担任がうまく受け止められる方法の開発も必要である。保護者会は、出席率も高くないため、保護者会を補う手だては必要である。

面談では、学校生活を楽しいと感じている生徒が多かったが、進路に関する話では、就職・進学と決めていても、多くの生徒は具体的なイメージがまだ漠然としていた。将来の夢がまだ描けないことへの不安を述べる生徒も何人かおり、不安を抱えている生徒への今後のケアは課題である。

今回の事例は、三年間を通じた計画的な進路指導の一部であるが、今後、進路決定に至るまでの取り組みを続けていくことになる。保護者との連携を密にとりながら、学年と進路指導部が協働し、学校全体として、１学年からの進路学習を実践していくことが必要である。

６　事例６　学校行事

集団や社会における自己のあり方を深める指導の工夫
～地域行事に参加することによって、学校行事の活性化を図る取組み～

(1)　指導のねらい

本校では、昨年度よりインターンシップ委員会を発足し、インターンシップ委員会の３つの柱（教科・特別活動・総合的学習の時間）の一つ（特別活動）として、地域行事への参加を昨年度より始めた。昨年度は、ホームルームでの参加という形態だったが、今年度は全校から有志を募集し、取り組んだ。

本校の生徒会活動・委員会活動や学校行事などの特別活動において、１・２年生がやや活発に取り組むようになったとはいえ、実際には生徒の自主的・主体的な活動が十分に行われているとは言えない。

やり方等が決まっていることを正確に行うことはできるが、自分たちで考え作り出していくことはあまり得意でない生徒が多い。この一因として人間関係を築く力、責任感、企画力の低下が考えられる。 そこで、「地域行事に有志を募り、参加するための過程の中で、生徒自らが計画を立て、話し合い、活動を振り返ることを通して、各自の役割と責任についての自覚など自己の在り方を深めることができれば、自主性、社会性が高められるであろう。」という仮説を立てた。

この仮説に基づき、本事例では次の①～③のねらいを設定した。

①　生徒に練習計画表を作成させ、自主性を高め、生徒主導の指導体制を作る。

②　全体でのミーティング、グループ単位のミーティングを通して、生徒が各自の役割と責任を自覚する。

③　地域行事終了後にアンケート、反省会を行い、生徒一人一人の取り組みを振り返る。

(2)　対　象　　全日制課程　有志２８名

（第１学年１６名　　第２学年３名　　第３学年９名）

(3)　取り組み

①　発表へ向けての生徒の状況と教師の指導について

今年１月１７日に行われた消防署の出初め式（ソーラン踊り）に参加した３年生を中心に、１・２年生への引き継ぎを行い、発表当日までの練習計画を立てさせた。それを教室や廊下に掲示することによって、生徒の意識を高めるようにした。

表１　生徒の取り組み内容

	活動内容・状況	教師の指導と援助
６月下旬	募集活動開始	３年生にリーダーの意識付け
７月上旬	初めての顔合わせ	
７月中旬	練習計画の作成	
９月２週	個人が踊りを覚えるための練習	
９月３週	グループ練習	３年生から「やる気を感じられない」と相談され、グループ練習を指示
９月４・５週	文化祭のため、練習中断	
１０月１週	練習を再開	全体ミーティング、目標の再確認
１０月２週	全体の構成に関わる練習	３年生だけのミーティング、リーダーとしての意識を持たせる
１０月１５日	仕上げ練習	全体ミーティング、本番当日に向けての諸注意
１０月１６日	発表 初めての全員集合	
１０月１７日	アンケート実施	
１０月２５日	アンケート結果の発表、反省会 全員参加	一人一人の意見を聞く姿勢、雰囲気 作りを３年生に指示

練習が進むにつれ、９月下旬から意欲が低下し始めたようで、練習への参加率が下がった。１・２年生ばかりではなく、３年生にも練習に参加しない生徒が現れ、全体への士気にも影響した。そこで、３年生だけのミーティングを開き、生徒たちに今後の活動について話し合わせた。しかし、「がんばって、１・２年生を引っ張っていこう」という生徒と、「自分の都合を優先したい」という大きく２つの意見に分かれ、まとまらずに終わった。そこで３年生のミーティングには教師も加わり、今後の方向性について検討し、練習に参加している生徒だけでも、がんばっていこうという方向を示した。この段階では、教師主導型でなく、生徒の自主性を尊重するスタンスをとったが、実際に練習を進めていく中で、３年生の１、２年生への働きかけがうまく行かず、集団としてのまとまりが弱くなった。そこで、教師が３年生中心にミーティングを頻繁に行い、練習することになった。発表当日は、全員出席し、ソーラン踊りを披露した。多少のばらつきはあったものの、完成度の高い演技となり、地域や保護者の方々から高い評価をいただいた。生徒たちも、達成感・満足感を味わうことができた。

②　アンケート結果及び反省会

発表終了後、地域まつりのアンケートを行った。また、そのアンケートの集計結果を生徒たちに知らせるとともに、反省会を行い、地域まつりの反省、次年度への抱負、練習を通して自己の変容について等を話し合った。

図１　地域まつりでの様子

(4)　結果と考察

①　アンケート結果

表２　アンケート結果（抜粋）

質　問　項　目	回　　答
①地域まつりに参加して、一番よかったことは何ですか。	・充実感、満足感、達成感が味わえた　(15人／28人) ・みんなと仲良くなれた　(13人／28人)
②地域まつりに参加して、一番つらかったことは何ですか。	・踊りの振りが覚えられなかったこと　(5人／28人) ・みんなが練習に集まらないこと　(10人／28人) ・他の人と意見があわなかったこと　(2人／28人) ・その他（アルバイトを休んだこと）　(11人／28人)
③あなたは今回チームの中で、どのような立場でしたか。	・リーダー的存在（中心）　(2人／28人) ・一生懸命踊る立場　(26人／28人)
④次回も地域行事に参加しますか。 １・２年生のみ回答	・参加する　(16人／19人) ・参加しない　(1人／19人) ・分からない　(2人／19人)
⑤次回は、どういう立場で参加しますか。	・リーダー的存在（中心）　(3人／16人) ・一生懸命踊る立場　(13人／16人)

アンケート結果では、全員が、「充実感、満足感、達成感を味わえた」「みんなと仲良くなれた」のどちらかを回答していることから、生徒たちは、参加したことについては肯定的にとらえていることが分かる。

しかし、生徒個々の役割を期待し、また理解して行動するという観点からは、「あなたは今回のチームの中で、どのような立場でしたか。」という質問に対し、２名がリーダー的存在と答えた。教師は、３年生を中心に練習等進めさせ、最上級生である３年生を中心にリーダーシップをとらせるよう自覚をもたせる指導を行ってきたのだが、残念ながらあまり伝わらない結果となった。また、「次回は、どういう立場で参加しますか。」という質問に対し、２年生が１名、１年生が２名、リーダー的存在と答えている点については、１・２年生の生徒の中にもリーダーシップをとる自覚が芽生えてきたことがわかった。

②　反省会

反省会では、それぞれが自由に発言できるような雰囲気作りをした。ほとんどの生徒が思ったことを自由に発言していた。そこで出てきた意見から、生徒たちと教師に認識の差があった。当初は、ソーラン節を地域の消防署の出初め式で披露した経験のある３年生が中心となって集団をまとめるという期待があったが、３年生の中でその自覚があったものは多くはなかった。

しかし、責任感についてふれる意見や「またやりたい」という意見もあり、教師の指導によっては、役割と責任についての自覚をしっかりもたせることができることがわかった。

図２　　反省会の様子

表３　反省会で生徒から挙げられた意見

①参加しようと思ったきっかけについて
・やってみたかった。　・かっこいいなと思ったから。　・目立ちたかった。
・興味があった。　・３年生で前回も参加したので、仕方なく参加した。　・なんとなく
②参加してみてどう思ったか
・疲れたが、うれしかった。またやりたいと思った。　・いろいろな人と知り合えた。
・先輩と仲良くなれた。　・達成感はあったけど、まとまり感はなかった。
・みんなが練習に出てきてくれなかったので、全体の場所や動きが決められなくて苦労した。
・みんなバラバラだったので、いやな思いをした。　・みんな責任感がないと感じた。
・アルバイトを休んでまで練習に参加したくなかった。　・練習に時間をとられるのはいやだ。
③今後について
・自分のやりたい範囲で参加したい。　・練習に参加することを強制させるのはいやだ。
・アルバイトを優先して参加したい。　・自分たちだけで練習するのは無理だ

(5)　今後の課題

望ましいリーダーを中心とした、生徒の内発的動機付け、すなわち生徒が実施の当事者となり、自律的に集団の一員としての秩序と責任体制をつくることが必要である。これには、学校行事を通して、ホームルームや学年の枠をこえてのつながりを強める段階的な取組みが必要である。また、ホームルーム合宿などを実施し、リーダー研修を行い、リーダーを育成することも必要である。この延長線上に生徒の内発的な動機が育成・習熟されるものと考える。単に有志を募り、生徒のやる気だけでは、教師のリードのみに終始してしまい、教師の一方的な指導になる。生徒が主体的に、実施・参加できる行事内容の精選などの基盤作りを教師で取り組み、その上で、生徒の有志参加や意欲のある集団が発生し、全校的な特別活動・行事の活性化という効果が現れるであろう。

一部集団の活性化が、教師の指導によりさらに次の展開につながり、地域行事のひとつとして個性的な取り組みとして根付くことも期待できる。それは、学校の個性化、特色化として学校文化としての定着を意味する。生徒が校外に出て地域の人々の支援や激励を受け、時には厳しい指摘を受ける場を意図的に経験させることは、生徒自身が「自分の生き方や在り方」を考え、深めるきっかけになると考える。

Ⅲ　まとめ

本年度の特別活動部会では、「集団や社会の中における自己の在り方を深める指導の工夫」という研究主題に基づき、「生徒が他者を受容し、互いにかかわりあう活動を展開することで、集団や社会の中で自己実現を図り、社会的に自立した個人として自己の在り方を深めようとする生徒が育成できる。」という仮説を設定し、研究を行った。

研究を進めるに当たって、本年度の教育研究員が議論を重ねたことは、「個に応じた指導の一層の充実」と「集団活動を通して」行う特別活動において、どのように実現するか、つまり集団活動と個人との関係性であった。その内容は、特別活動における個に応じた指導が決して一人一人の個別指導に終始することではなく、集団活動における他者とのかかわり合いの中で連帯感を深め、相互作用の中で生徒の自主的な活動が展開され、集団や社会における自己理解を深めることができるということであった。

こうした観点を踏まえながら、自己実現を図ろうとする生徒、自己の在り方を深めようとする生徒を育成するため、それぞれが具体的な実践場面における仮説を設定した。そして、本分科会で設定した指導の観点に留意しながら、指導のねらいや指導計画を立案し、アンケートや話し合い、個別面談など、生徒の変容を多面的にとらえることのできる方法を工夫しながら、それぞれの実践に取り組んだ。

事例１では、「楽しむ」を目標とした集団活動を通して、生徒が相互の連帯感を深め、互いに受容し合うことで、個性を他者から認められるものとして発揮することができた。

事例２では、ホームルーム活動や担任との二者面談を通して、生徒が自己の規範意識と社会生活上のルールやマナーとのズレを認識することにより、望ましい規範意識を高めることができた。

事例３では、場面に応じた活動を通して、生徒が他者の価値観を受容し相互評価しあうことにより、自己理解を深めコミュニケーション能力を高めることができた。

事例４では、ワークシートを利用したグループワークを通して、自己と他者を肯定的にとらえることで自己理解･他者理解を深め、より良い人間関係の在り方に気付かせることができた。

事例５では、アンケートや進路ニュース等を用いて家庭との連携を図りつつ、継続的な進路学習を行うことで、自己実現に向けて意欲的に取り組み、自己の在り方を深めることができた。

事例６では、地域行事に有志を募り、参加するための過程の中で、各自の役割と責任についての自覚など、自己の在り方について自覚を深めることができた。

これらの実践事例では、生徒の自己の在り方を深める指導の工夫を考え、それぞれの仮説に基づき研究を進めてきた。生徒の自己の在り方については、一人一人の人間性の成長と深く関係しており、全人格的な到達度を評価することが難しい。そこで、生徒の変容を多面的にとらえ見いだすようにすることで、生徒の自己理解を深める指導の有効性を検討してきた。

社会的自立を支援する教育の重要性が叫ばれるなか、特別活動の果たす役割はますます重要なものとなっていくと考えられる。青少年の問題は大人社会の問題の反映であることを意識し、今後も「集団や社会の中における自己の在り方を深める指導の工夫」の観点を踏まえながら、各学校で計画的、継続的、組織的な指導を行っていくことが大切である。

平成１７年度　教育研究員名簿（　特別活動　）

区市町村名 地区	学　校　名	氏　　名
2	都立　小石川工業　高等学校	◎　鈴木　誠
5	都立　台東商業　　高等学校	○　西牧　豊実
1	都立　赤　　坂　　高等学校	松本　治子
5	都立　上　　野　　高等学校	遠藤　由美
6	都立　両　　国　　高等学校	高橋　省司
6	都立　江東商業　　高等学校	古川　博久

◎世話人　○副世話人

担当　東京都教職員研修センター指導主事　　杉浦　文俊
指導主事　　佐藤　文泰

平成１７年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成１７年度　　第１２号

平成１８年１月１６日

編集・発行　　東京都教職員研修センター
所在地　　東京都目黒区目黒一丁目１番１４号
電話番号　０３－５４３４－１９７４

印刷会社名　　株式会社　今　関　印　刷